

＜前回＞ニュートン主義の自然神学

1. 17世紀のイギリスの状況

政治：絶対王制／共和制、ピューリタン革命と王政復古、名誉革命
王党派と議会派

経済：封建的経済秩序／資本主義・市場経済

宗教：イギリス国教会／ピューリタン右派から中間派、そして左派

2. マートン・テーゼ：キリスト教（とくにプロテスタント・ピューリタニズム）は近代科学の形成に積極的かつ実質的な寄与を行った。王立協会の初期のメンバーの多くはピューリタンの信仰の持ち主であった。

3. ニュートンは政治的には、強硬な絶対王制と極端な共和制の中道（穏健な王制）の支持する立場にあったが（政治家ニュートン）、その点で、信仰的には国教徒（実は、アリウス主義者）であったニュートン（科学者であると同時に熱心な宗教者、神学者ニュートン）は、穏健なピューリタンと思想的に一致できた。マートン・テーゼは、まさにニュートンとニュートン主義者によく当てはまると言える。

穏健な王制・国教会体制を擁護するという機能を有するいわばイデオロギーとしての科学。

4. 17世紀までの多くの科学者にとって、自然探究は、神の創造の偉大さを讃美すること（＝宗教的業）であり、ニュートン科学は、無神論論駁という意図と結びついていた。

ニュートン研究の進展 → ニュートンの知的世界の全貌

自然科学／自然哲学／自然神学／歴史神学／聖書解釈

5. ①パントクラトールあるいは主という言葉遣い、あるいは神の統治や支配の強調

②無神論論駁のための神の存在論証

③自然哲学とその神学的根拠

6. 主なる神の支配とその秩序（自然と歴史の全体）

7. イデオロギーとしての自然神学・自然科学

共和主義と無神論（唯物論）との連合体に対する、王制と国教会連合という図式。

ボイル講演：講演者には、ニュートンの弟子たち（ベントリー、デラム、クラークら）が多く選ばれた。

ニュートン主義の自然神学・デザイン神学

1) 世界における見事な秩序・法則

2) 偶然ではない

3) デザイナーとしての神の存在

4. シュライアマッハー神学の意義

(1) シュライアマッハー(Friedrich Ernst Daniel Schleiermacher, 1768-1834)の特徴

①近代プロテスタント神学の父

啓蒙主義的な神学的合理主義と伝統主義との間・総合

同時に、近代解釈学の父、現代宗教学（宗教現象学）の父

②啓蒙思想とロマン主義の総合

カント・フィヒテ→	ロマン主義運動→	体系構想 (神学－哲学)
ヘルンフト兄弟団	1796(29)	1810(42)
ハレ大学神学部 (宗教的懐疑)	ベルリン	ベルリン大学神学部
1787(19)	『宗教論』(Reden) 『モノローゲン』	

③解釈学・弁証法・倫理学、体系家→信仰論 (『信仰論』(Glaubenslehre))

Dogmatik から Glaubenslehre へ
自由主義神学

(2) 『宗教論』の信仰概念

1. 信仰・宗教の規定

意図：宗教の独自性－宗教学の基礎、宗教哲学
宗教多元性の問題 (第五講)

2. 形而上学・倫理学との区別

宗教の本質について (宗教本質論・第二講) → 「直観・感情」(「本質－現象」の枠)

1) 直観：有機体的な統一的な宇宙、スピノザ的

無限と有限：表現、象徴

2) 感情「それは多様性と個性とを象徴にした無限で生きた自然という根本感情」「無限に向かう憧れ、無限に対する畏れの心」

「聖なるあこがれ」「内なる本性の呼び掛け」

3) 直観と感情

4) 形而上学と道徳

3. ロマン主義

(3) まとめ

①宗教・信仰の直接的場へ「感情」「直接意識」 → 宗教現象学へ

②人間性における宗教 → 弁証神学、宗教の本質概念 (本質論から現象論へ)

③「感情」から「認識」「行為」へ → 人間の存在構造における宗教性

これは、信仰を精神の諸機能の一つの特定機能としての知性、意志、感情のいずれかと同一視することの不十分さを意味する。むしろ、これらの諸機能を統合した人間精神 (人間理性、人間存在＝実存、人間性) における本質的な可能性として宗教・キリスト教を理解すること、その上でその特殊な実現としてのキリスト教的信仰の意義を論じることが、要求される。

④実定性 → 個別的で歴史的な諸宗教への定位 cf. 理神論

<テキスト・『宗教論』筑摩書房>

第一講 弁明	宗教批判
第二講 宗教の本質について	宗教本質論
第三講 宗教へ導くための教育について	
第四講 宗教における集団について あるいは教会と聖職について	
第五講 さまざまの宗教について	宗教的多元性

「宗教がまっさきに心情に語りかけてくるもっとも内面的な深みへ、きみたちを案内したいのだ」(17)、「人間存在の内面へ」(18)、「きみたちが軽蔑しているこれらの体系の中には、宗教は見出されないのだ」(22)、「完全にそれ自体で独立していなければならない」(28)、「宗教はまったく独自の役目を果たさなければならない」(29)、「宗教は、人それぞれのすぐれた魂の内部から必然的に、おのずと湧き出てくるということ」(30)、「宗教は形而上学や道徳と区別すべきである」(35)、「最高の存在者、あるいは世界についてのいろいろな意見[形而上学]と、一つの(いや、そればかりか二つの)人間生活に対する命令[道徳]のごた混ぜを、きみたちは宗教と名付けているわけだ」(37)、「宗教の本質は、思惟することでも行動することでもない。それは直観と感情である。宇宙を直観しようとするのである。宇宙の独自の、さまざまな表現、行動の中にひたって、うやうやしく宇宙に聴き入り、子供のように受け入れる態度で宇宙の直接の影響にとらえられるよう、宇宙に充たされよう、とする」(42)、「宗教は無限なものを受け入れる感性、趣味である」(44)、「高次の実在論」(45)、「直観するとは、直観されたものが直観するものへ及ぼす影響、すなわち、直観されたものの根源的、独立的な動きに基づいている」(46)、「すべての個体を全体の部分として受け取り、すべて制約されたものを無制約的なものの表現として受け取る、これが宗教である」(46)、「世界におけるすべての出来事を神の働きと考えること、これが宗教なのだ」(48)、「すべて存在するものは、宗教にとっては、真実な、それなしではすまされない無限なもの象徴なのだ」(54)、「あらゆる直観は、その本性から感情に結び付くのである」(54)

<文献>

1. シュライエルマッハー 『宗教論』岩波文庫、筑摩書房。
Über die Religion. Reden an die Gebildeten unter ihren Verächtern (PhB 255).
On Religion. Speeches to its cultured despisers
 (translated by Richard Crouter, Cambridge University Press, 1988).
 Introduction. pp.1-73.
2. 大峰 顕編『神と無』(『叢書ドイツ観念論との対話』[5]) ミネルヴァ書房。
3. プレーガー 『シュライアーマッハーの哲学』玉川大学出版部。
4. 武安 宥 『シュライエルマッハーの教育学研究』昭和堂。
5. 川島堅二 『F・シュライアーマッハーにおける弁証法的思想の形成』本の風景社。
6. ティリッヒ『キリスト教思想史Ⅱ』(ティリッヒ著作集・別巻3) 白水社。
7. 波多野精一『宗教哲学』『宗教哲学序論』『時と永遠』岩波書店。
8. 武藤一雄『神学と宗教哲学との間』創文社。
9. 芦名定道「ティリッヒとシュライアーマッハー」、『ティリッヒ研究』(現代キリスト教思想研究会) 第2号、2001年、pp.1-17。

< Web >

川島堅二氏のサイト：<http://homepage3.nifty.com/ex-cult110/schleiermacher/>
 日本シュライアーマッハー協会：<http://www1.doshisha.ac.jp/~sgjapan/>